

## ロシアにおける民俗学の誕生

坂内徳明

### 一

#### (1) ロシアにおける民俗学の誕生

ロシアに民衆としてのナロードが存在しなかった時代があった。それが言説として作り出されたのは近世の比較的短期間においてである。すなわちそのプロセスは、一八世紀初頭に展開するピョートル一世の「ペレストロイカ」の時期に始まり、同世紀後半のエカテリーナ二世の時代に本格化し、そして一九世紀初頭までに完了した。本来、文化概念・関係概念であるはずのナロードが実体概念へと転じていくためにはひとつの「文化的神話」が作られなければならない、そのためのプログラムが必要であった。そのプログラムは、権

力者とインテリゲンツィヤによるロシア社会と文化の「形成」をめぐる多数の衝突の中で描かれていった。したがって、一八世紀初頭から一九世紀初頭にかけてのロシア史上の転換期にあって、ロシアのナロードという言葉がいかにして作られていったか、一八世紀後半に階層として登場するロシアのインテリゲンツィヤの中にあつてナロードノスチ（ナロードたることとの在り様と条件）がどのようにに争奪されていったのか、言い換えれば民衆の日常・習俗と心性の総体としての文化がどのように「発見」され、記述されていったのか、というプロセスを再構成することが重要である。そしてこの点こそが方法としてのロシア民俗学史

の出発点となるはずである。<sup>(1)</sup> 本稿はそのための準備的  
覚書きとなる。

(1) こうした問題設定は、次節にあげる「学史」に関するモノグラフが不十分ながら提起しているとはいえず、具体的な仕事はいまだおこなわれていない。むしろ、例えば一六六〇年代から一七〇〇年までの中世文化から新文化への過渡期の文化史的分析をおこなったアレクサンドル・パーンチェンコによる『ピョートル改革前夜のロシア文化』(レニングラード、一九八四年)にひとつの示唆がある。

## 二

いわゆる学説史の視点からすれば、ロシア民俗学・民俗学研究が近代の実証科学として理論的かつ組織的・制度的な基盤を獲得したのは、一八四〇年代のことである。このことの社会的・思想史的問題は別に論じなければならぬが、二点だけ指摘しておく。ひとつはこの時期が、ロシア中世文学・芸術・美術とともに叙事詩や民謡、昔話を中心とした口承文学研究がフォードル・ブスラーエフによりモスクワ大学の講義

科目となった時期に当たっていたことである。このブスラーエフを筆頭に、ドイツからの影響に多くを負っていたとはいえ、研究方法をめぐるロシアでの最初の「学派」である「ロシア神話学派」の研究者たち(アレクサンドル・アフナーシエフ、アレクサンドル・コトリャレフスキイ、パーヴェル・ルイーヴニコフなど)が登場したのがこの時期だった。したがって、ブスラーエフによって、すなわち「前ブスラーエフ期」という形で民族学史を区分することが一般的におこなわれてきたのである。

もうひとつは、一八四五年の帝室ロシア地理学協会の創設である(同年五月のフォードル・リートケ、カルル・ベル、フェルジナンド・ヴラインゲリによる意見交換にはじまり、九月のヴラジミル・ダーリ宅での創設メンバー会議ならびに一〇月の第一回全体会議<sup>(2)</sup>)。その全体会議での合意によれば、この協会は一般地理学・ロシア地理学・ロシア民族学・ロシア統計学の四部門から構成されたのであり、一九世紀後半に広範に展開される民俗学・民族学的な遠征・調査と資料収集

はこの地理学・民族学・統計学というジャンル区分の中でおこなわれていくことになるのである。<sup>(3)</sup>

こうした一八四〇年代の方向性は、一八六〇年代のロシア民俗学の「黄金期」へと継承されていくことになるが、これによっていわば、実証科学としての民俗学・民族学の成立の条件と枠組みが整ったのだった。

そしてこのことは他方で、「学史」の構想を生むことになる。すなわち、スラヴ派対西欧派のいわゆる思想史上の論争を継承しながら、その論争を越えるために「民俗学・民族学」のヒストリオグラフィが書かれなくてはならなかった。民族・民俗文化の学問的研究と時代の社会的動向とを意識的に結びつけること、さらには、フォークロアと民族的習俗に関する学のあらゆる発展段階を民族的自意識の歴史として描くことを基本テーマとしたアレクサンドル・ブイーピンの「民族学史」は、こうして生み出されたのである（彼の構想自体は一八六〇年代に生まれたが、それが断片的な論文として発表後、大著『ロシア民族学史』全四巻として刊行されたのは一八九〇―九二年のことである）。

(1) ブスラーエフのフォークロロにたいする関心については、アルカジイ・バラレンディン『ロシア民俗学における神話学派』（モスクワ、一九八八年）、また、サヴァチイ・スミルノフ『フォードル・イヴァノヴィチ・ブスラーエフ』（モスクワ、一九七八年）

(2) 『地理学協会の一二五年』（レニングラード、一九七〇年）。一八四七年で時代区分したドミトリイ・ゼレーニンの説（『東スラヴ民族学』一九二八年、ロシア語訳は一九九一年）は修正されるべきである。

(3) 『ロシア地理学協会仮規約』（サンクト・ペテルブルグ、一八四五年）には全六五条の規約と会員メンバー一覧が掲載されている。ロシア地理学協会創設に関連してその理論的支柱となったベル、ニコライ・ナデジディンらの立場と構想については、N・ステバノフ『ロシア地理学協会と民族学。一八四五―六一』『ソヴィエト民族学』一九四六年四号。さらに言えば、協会の名に「帝室」の言葉が冠せられていたにもかかわらず、「自由」で多様な意図をもった、基本的には在野の研究者とその集団によって担われていったことは一八一―九世紀ロシア文化史における人的集合・グループ・サークルの作られ方、人の繋り方という重要なテーマを考える上で注目すべきである。

## 三

こうした学説史の立場からすれば、一八世紀の民俗学・民族学的な関心とそれにもとづいて生まれた仕事の在り様はきわめてあやふやで、あいまいなものに見える。一九世紀的な実証科学の要件を満たしていないばかりではなく、まして二〇世紀初頭以降、現代にいたる「科学的精密さ」への強固な信仰からすれば、ディレクタンチズムに満ち溢れた恐ろしく眩惑的・非科学的なものであって、現代的でないものとし映ってこない。むしろ、一八世紀のこの分野の仕事が現在もおお多大な意義を持つことは確認されてきた。例えば、一八世紀に始まるロシアの民族学資料収集・博物館とこの学の関わりを丹念にフォロワーしたタチャナ・スタニューコヴィチは述べる。「民族学にとって一八世紀とは、学問的資料の蓄積と研究方法、そしてまた学の対象そのものの探求ならびに形成の世紀であった」(『民族学と博物館』一九七八年)。にもかかわらず、先にあげた一八世紀の民俗学・民族学にたいするぬぐい

がたい「不信」はこの時期を学の前史的段階として扱うことを一般化してきたのである。そのことはこの分野のヒストリオグラフィとして現時点までで最も基本的なモノグラフィであるマルク・アザドーフスキイ(『ロシア民俗学史』一九五七年)、ブイーピン(上掲書)、セルゲイ・トールカレフ(『ロシア民族学史』一九六六年)らの著作に明らかである。

しかしながら、文化の現場を記述するにあたって、記述の方法そのものも含めて問わねばならぬ場合、いかえるならば、学自体の存立基盤であるプリンシプルから再考しなくてはならぬ場合、「前史」という概念はおそらく有効ではありえない。それらの学のプリンシプルを貫通する何かがあるのかどうか問われ、プリンシプルを支える共通項それ自体が求められているからである。だとすれば、民俗学・民族学と「隣接する」学としての地理学・歴史学とのテリトリイ意識の欠如と不透明さは、われわれ現代のジャンルにたいする認識の枠組みをゆるがすものとはならないだろうか。むしろ民俗学と民族学との境界があいまいで、この両

者の間のボーダーの引き方が「非実証的」であることは、逆に文化の現場そのものの在り様とそれに相対し記述する者の「方法」をのぞかせてはくれないだろうか。

#### 四

一八世紀初頭・前半のピョートル期における、ほとんど渴望とまで呼びうる「学問」への関心の高まりは、まさしく新しい時代の到来とそのため新たな文化創造への呼び掛けを意味していた。この関心の具体的様相については、ピョートル・ベカールスキイの『ピョートル大帝期の学問と文学』（一八六二年）に詳しいが、ロシア最初の「パブリックな」博物館であるクンストカーメラ（現在のロシア科学アカデミー民族学・人類学博物館）の開設（一七二四年）、そして一七二五年のロシア科学アカデミー創設に象徴されるように、それは、それまでの「中世的」知識・世界観の集大成とその組み替え・再編成・再構築による学の自立のための運動として展開していくことになる。ロシアのみ

ならず、全世界の文物と知識をすべて登録し、文節化・系列化することこそピョートルの「早すぎた百科全書」的理念とその世界観とをもっとも忠実に反映することであり、それを具現化した施設と組織がクンストカーメラと科学アカデミーであった。そして、これらの制度を支えるものこそロシアの「近代学問」という言説だった。

ピョートル時代の「申し子」とも言うべきヴァシリイ・タチーシチェフが「学の効用」を執拗に問い（「学校と学校の効用に関する二人の友人の会話」一七三三年）、フェオファン・プロコポヴィチの盟友として同じくピョートルの文化的イデオロギーの大いなる理解者で協力者であったアンチオフ・カンテミールが「風刺詩第一、学をそしめる者たちにむけて」（一七二九—四三年）を書いて、おそらくロシア最初の学へのオリエンテーションとプロバガンダをおこなったのはそのためであった。<sup>(1)</sup>（そしてこの課題と事業を正統に継承したのは、言うまでもなく、ミハイル・ロモノソフという文字通りロシアの「ルネサンス人」である）。

しかもそれは、学の一方的な歌い上げと「有効性」のオプチミズムにみちた謳歌としてではなく、学の成果である知性にたいするアイロニーと近代的自嘲がそこにこめられていた点においてすぐれた学批判・アカデミズム批判になっていたのである(「風刺詩」の冒頭、「日の浅い学の成果たるわが未熟な知性よ、安んじているがよい、私にペンをとらしめるなかれ」。さらに、「知性よ、黙せ、人しれず家にあつて悲しむことなかれ」。「自らの内で学の効用を思いながら、密やかに楽しむがよい。学の効用を口に出すことで悪しき誹謗を身に招くなかれ」)。

(1) しかもこれらがともに、印刷されずに筆写によって広く伝わっていったことは、この時代のみならずロシアにおける学の在り方と学への意識をあざやかに示してくれる。

## 五

過渡期がそれまでの文化にたいして「絶交」と「切断」をせまり、しばしば「新旧論争」として展開する

ことはロシアのみにとどまらない。ピョートルがペテルブルグ建設に象徴される「新しい」ロシアを建設しようとして構想したことは、それまでのロシアを、モスクワを象徴とする「古い」文化として対置させることとなった。石の新首都にたいする木のモスクワといった、実体とは必ずしも一致しないひとつのイメージが発生し、それが神話化していったのである。

新文化と旧文化の対立をめぐる神話がロシアの時間感覚にたいして絶大な影響をもたらしたことは言うまでもない。「新しい」時間が必要となり、それは何よりもまずピョートルによる暦法改正(一七〇〇年)として具体化した。そして次には、現在の社会と文化の起源を明示化し、現在と過去とを結び付けることよって逆に「古い」時間を過去として「葬り去る」ための歴史叙述が必要となった。時間の「新しい」記述が求められたのである。ロシア史学史上で最初の「ロシア史」としてタチーシチェフの『最古からのロシア史』(1)が執筆されたのはこうした背景の下においてである(科学アカデミーに提出されたのは一七三九年のこと

であり、以降、刊本については多くの経緯があったが、一九六二―六八年に全七巻として刊行された。そして、このタチーシチェフから『ロシア国家史』(一八一六―二九年)のカラムジンへといたる歴史叙述の歴史こそが史学史「前史」という枠をはるかに越えて、ロシア文化の記述そのものの問題と深く関わっているのである。

そうした時間・歴史意識の変革が生活・日常の習俗に変容を迫ったことは当然である。その変容の具体的な諸相については、ここではふれないが、ただひとつ、アンドレイ・ポロトフのメモリアルにおける個人の一生・生涯にかかわる時間感覚とその記述について言及しておく。社会・国家であれ、個人であれ、時間をめぐる感性とその変化による記述意識の覚醒という点では共通すると考えられるためである。

一八世紀という大きな社会変動と革新の時代の真只中において、一個人としての生涯・自身のそれまでの過去の人生とこれからの行く末に思いを馳せることが時代のスタイルであるとすれば、メモリアルはもっ

とも求められるスタイルを備えたジャンルであった。

ピョートル期に突入するとほぼ同時に、つぎつぎと書かれた「覚書き」「思い出」「メモ」はまさしく時代そのものの要請した「個人史」である(ピョートル・クレークシン、アンドレイ・マトヴェーエフ、ナタリヤ・ドルゴルーカヤ、ミニフ伯、ミハイル・ダニロフ、エカテリーナ・ダーシコヴァ公爵婦人、ヴァシリイ・ナシチョーキン、シャホフスコイ公爵など。ペカールスキイ「一八世紀ロシアのメモリアル」『同時代人』誌、一八五五年、を参照<sup>(2)</sup>)。

しかし、そうした回想記作者の中においてひとり群を抜く存在がポロトフである。それは、簡単に言って、彼が他の作者の大部分と違ってさして裕福でない貴族の出であったこと、そして、彼の残したメモリアルが膨大であることのためである。彼は、一七三八年に生まれ、四八年に兵役に入り、六二年の除隊後は故郷トゥーラ県の領地で暮らし、一八三三年の死まで、自らの心の欲するままに文字どおり「田園の生活」を満喫した一介の「家政人」であった。外国語文献も含、

めた多数の書を読み取り、農業技術・方法の開発や農地経営法、生物学、土壌学、医学、絵画、作曲、造園や都市計画、さらには孤児、農民のための学校開設までも手を伸ばした彼は、ミハイル・チュルコフや

ニコライ・リヴオフらといった「万能人」と同時代人間だった。そうした彼が、五一歳の一七八九年から書き始めたのが、本にすれば四〇〇ページで二九巻におよぶというメモアール『子孫のために自分自身によって書かれたアンドレイ・ポロトフの生涯と冒険』である。回想は自分の誕生から一八二二年までだが、彼の視線は自らの幼少時代とそのルーツ、家庭生活から

はじまって、自然の森羅万象、風景や庭園、農事全般、さらにはプガチョーフの反乱といった政治的・社会的出来事にも及んでいる。彼自身は「貴族的」な見解の持ち主で、農民の祭や儀礼、昔話などにたいしてはあまり好感を示していないにもかかわらず、彼がそれ自体は当たり前前の日常そのものを記録するという「習俗記述」(ブイトピサーニエ)というジャンルの創始者となったことは明確である。「田舎」「田園」にス

タンディングポイント(中世であれば、森の只中であらう)を置き、そこから見た世界をすべてまるごと記録したことはロシア記述史の上ではまったく最初の試みであった。

メモアールの中では、そのタイトルが示唆しているとおりに、日常の習俗の中で繰り返される「事件」「出来事」の連続がごく普通の一個人の人生を形作ることに、いいかえれば、個人の「私的」時間があることの確認がおこなわれた。彼が書き取った半世紀以上にもわたる「個人史」は、新しい生活・人生サイクルの出現とそれに対応して変化せざるをえなかった時間意識を示すものである。<sup>(4)</sup>

(1) タチーシチェフの仕事と生涯の概観は、とりあえず、『大正大学研究紀要』七三、七四、七五、七六号に収録された阿部重雄の論文を参照、タチーシチェフも含めた一八世紀の史学史については、セルゲイ・ペーシッチ『一八世紀ロシア・ヒストリオグラフィ』(全二部、レニングラード、一九六一、六五年)。

(2) 一八世紀後半のメモアールの全容は『ロシアのメモアール、選ばれた数ページ・一八世紀』(モスクワ、

一九八八年)。さらにA・タルタコフスキイ『一八世紀—一九世紀前半ロシア・メモアール文学』(モスクワ、一九九一年)。

- (3) ただし、公刊されているのは一七九五年の分までである。現在まで刊行されている版としては、M・セメーフスキイ編(一八七二—七三年)、「若き親衛隊」出版所の版(一九三〇年)、「アカデミア」出版所版(一九三一年)などがあるが、近年、セメーフスキイ版をもとに信頼できる二巻本(トゥーラ、一九八八年)が、また、独訳(二巻本、ミュンヘン、一九九〇年)が出た。もっとも、いずれも省略版である。ポロトフの伝記は、アレクサンドル・ペールドイシエフによって最近、刊行された(モスクワ、一九八八年)。論文集『エカテリーナ大帝時代のロシア文学』(一九七六年)収録のJ・ライスの「ポロトフのメモアールとロシア文学史」は、簡略ながら、ポロトフの文学史的位置とメモアールの意義をまとめている。
- (4) 個人の生涯の物語は、むろん、中世ロシアにも「聖人伝」という形で存在したが、性格のまったく異なるものであることは言うまでもない。

## 六

ポロトフは、中央ロシアの片田舎であるトゥーラの領地に引き籠もって居住し、ひたすら回想録の執筆と趣味に打ち込んでいたにもかかわらず、それは「世捨て」でも、社会との「絶縁」でもなかった。その証拠に、彼は驚くほど多くの人々と交際していたのである。その交流の一端として、当時生まれたばかりの新しいメディアである「雑誌」へ投稿したり、自らも雑誌を発行しているのである。

一八世紀の、特に後半は、雑誌ブームの時代だった。読者・出版者・執筆者と批評家が社会層として生まれ、雑誌を中心として議論する、いわば雑誌ジャーナリズムの勃興期にあたっていた。一八世紀初頭からの「通報」(一七〇二年)、「サンクト・ペテルブルグ通報」(一七二七年)などが「上からの」出版物であったのになんて、後半になると、フォンヴィーゼンの「働き者の蜂」(一七五九年)、ルソーの紹介で知られる「役立つ娯楽」(一六〇—六二年)などを皮切りとして、

一七六〇年後半からは、いよいよ雑誌時代の本格的な到来となる。これには、エカテリーナ二世自らの刊行による週刊誌「あらゆること」(六九一七〇年)とニコライ・ノヴィコフの「雄蜂」(六九一七〇年)、ミハイル・チュルコフの「あれもこれも」(六九九年)、ルバンの「あれでもなく、これでもなく」(同)の間にくりひろげられた「風刺論争」も一役買う形となった。特にノヴィコフの活躍はめざましく、一七六〇年代末から八〇年代末までの二〇年ほどの間に彼が手がけた雑誌は一〇種を越えるのであり、まさにロシア最初の天才的ジャーナリストであった。<sup>(1)</sup>そして、このノヴィコフが切り開いた道は、一八世紀末にいたってイヴァン・クルイローフやカラムジンといったロシア最初の「作家」たち(むろん、彼ら自らも雑誌発行をおこなった)の作品を掲載する「文学作品集」へと通じていくのである(バーヴェル・ベルコフ『一八世紀ロシア・ジャーナリズム史』モスクワ・レニングラード、一九五二年)。

ノヴィコフとポロトフとの運命的な出会いは一

七七九年九月、モスクワでのことである。<sup>(2)</sup>自身がその日を「わたしのほぼ全生涯でもっとも忘れ難き日」と呼んでいる。ポロトフは、ノヴィコフのマソンにたいする思いこそ認めなかったが、このジャーナリストが計り知れぬほど大きな役割をロシアの文学と文化全体に果たすであろうこと、そして終世変わらぬ友人となるであろうことを理解したのだった。そして、事実、この予感どおりとなった。ノヴィコフの物質的・精神的援助の下に、ポロトフは『経営雑誌』(一七八〇―一八九年)、『村の住民』(七八―七九年)といった農村・農家経営を主な内容とした雑誌の編集と刊行に関わることになるのである。

雑誌というメディアの場合は、このポロトフとノヴィコフの場合に見られるように、友情を前提としなくては成立しえぬものである。ポロトフのような「地方人」にとっても、友情によって出来上がる「社会」が存在しえた。一八世紀後半から一九世紀前半にかけて、中央、地方の別なくロシア各地で続々と生まれていった「文学サークル・グループ」「文学サロン」

(M・アロンソン、S・レーイセル『文学サークルとサロン』レニングラード、一九二九年、N・ブローツキイ編『一九世紀前半の文学サロンとサークル』モスクワ・レニングラード、一九三〇年、に詳細な団体リストとその場の様子を知り得る記事が収められている)は、そうした「社会」の在り様をはっきりと物語っている。以降、民謡や昔話の収集へと向かう民俗学もロシア文学と同じく、サークルによって生まれたバブリックな空間にその揺籃の場を負っていった。一九世紀半ばに、ピョートル・キレーエフスキイと彼を取り巻く当時の大多数の作家・インテリゲンツィヤによっておこなわれたロシア民謡の収集は、このサロンとサークルの文化的意味を考えることなしには理解できない。

(1) ノヴィコフについては、秋元春朝「ロシア啓蒙運動史序説」『神戸大学教育学部 研究集録』八二、八三集、一九八九、九〇年。また、ノヴィコフの発行した「ロシア最初の児童雑誌」について、藤沼貴「心と理性のための子どもの読み物」一一三『ソ連出版文

化通信』一九八五年、四一六号。

(2) この二人を正面から対置させて論じたのが、一九〇四年に書かれたとされる詩人アレクサンドル・ブローツキイの学士論文「ポロトフとノヴィコフ」であり、現在もなお、この一八世紀の文化人双方の研究に欠かせない。

## 七.

ロシア人であれ、非ロシア人・西欧人であれ、中世ロシア時代の空間移動が、聖地巡礼にみられる宗教的契機、または通商を目的とした商業的契機によっておこなわれたとすれば、一八世紀以降のそれは、まさしくピョートルの「西欧行き」(一七九七—九八年)に象徴されるとおり「見物」「研修」を目的とする、その意味では、文化の「見学」「観察」のための移動であった。いわば、ロシアの旅行史の幕が切っておとされたのであり、それはたんに、ピョートルという一個人の趣向の問題ではなく、時代全体のパーソナリティとしての「空間」への好奇心の在り方と空間認識の変容を

示すものであった。一八世紀という、ロシアにとって「探検と調査の世紀」の到来は、まさにビョートルという時代の最高権力者自身の手で準備された。

ビョートルの晩年に元老院書記官の地位にあり、彼の改革事業の継承者のひとりとなったイヴァン・キリロフがロシア最初の組織的な地形測量をおこない、『帝国全土地図』の作成と出版を企画したことは文字通り、ロシア地理学の幕開け宣言であった。<sup>(2)</sup> その『地図』は自費出版でしか、しかも一部分しか日の目を見ず、しかも完備したものとしては現存しないが、それにかわって彼の主著となった『全ロシア国の繁栄状態』(一七二七、三七年執筆、一八三一年に初めて刊行、最近のものとしては一九七七年刊)は、彼自身ならびに彼の派遣した調査者たちの報告にもとづいたビョートル期ロシアの国土全域にわたる詳細な記述となっているのである。

ロシア帝国の領土拡張と度重なる戦争という下部構造を持つ、シベリアも含めたロシア各地への調査・遠征旅行は、ベーリングの北太平洋探検に始まり、ロシ

ア科学アカデミーの指揮下、ステバン・クラシエニールニコフ、フォードル・ミールレルらの参加でおこなわれた二度のシベリア探検(一七三三―一七三六、一七六八―一七四年)によって大きく発展し、さらに、イヴァン・レビョーヒン、ビョートル・イノフォードツェフらによる北ロシアへの調査旅行へといたるのである。<sup>(3)</sup>

これらの調査・遠征が一九世紀半ば以後の、多少なりとも学問別の区分を持ったものと違って、地理・地誌・動植物・鉱物などを包含した「博物学的」としか言いようのない無数の対象の発見をもたらしたことは、その成果たる多大な調査記録を見ることで確かである。そしてそれらの調査報告書・紀行文はまた、ひとつの「民族誌」の原型を作り出したのである(ビョートル・パラス『ロシア帝国各地方の旅行記』(一七七一―一七六六年、ロシア語訳は一七七三―一七八八年)、イヴァン・ゲオルギ『ロシア国家内に住むすべての民族、ならびにその儀礼、習慣、衣服、住居、装飾、娯楽、信仰と記念物の記述』(一七七六―一七七年)。

しかし同時に、こうした探検と調査は、「田舎」「地

方」、さらには「辺境」というそれまでの空間認識の枠内にはなかった異質な空間を生み出すことになった。ニコライ・カラムジーンの『ロシア人の旅行者の手紙』(一七九一—九二年)とともに、一八世紀という「旅行の世紀」の到達点を示したアレクサンドル・ラジシチエフの『モスクワからペテルブルグへの旅』(一七九二年)は、エカテリーナ二世の南ロシア旅行とその『旅行記』の、さらにはL・スターン作『センチメンタル・ジャーニー』のパロディ作品であり、かつ、両首都間のロシア農村地帯の農奴制下にあえぐ農民生活のすぐれた「告発」かつ「哀歌」として、旅行という経験を見体的素材とした「文化の発見」の記述となっている点で大きな意義を持つ。しかし他方で、この『旅』は作者の意図を越えて、ロシアの空間の中に「農村」ないし「田舎」という空間の異質性を浮かびあがらせることとなったのである。同じことは、一九世紀以降現在もなお、ロシア全体にとっての「魂の故郷」・ロシア精神の源泉かつ拠り所とされることの多い北ロシア(セーヴェル)についても言えて、一八世紀後半

のこの地域にたいする熱いまなざしが、その持ち主や観察者たちの思いとは反して、「辺境」「停滞した後進地域」としての北ロシアというイメージを作り上げ固定することとなっていったのである。<sup>(4)</sup>

(1) 西欧からの「旅行者」の記録は、F・アーデルンクの『ビブリオ』一七〇〇年までのロシアへの旅行者とその著作の批評的・文献学的概観』(サンクト・ペテルブルグ、ライプチヒ、一八四六年)に、一四七三年から一六九九年までの一五七点があげられていて、概要がわかる。

(2) キリーロフについては、三上正利「キリーロフの生涯とその著『全ロシア国の繁栄状態』」ナウカ社『窓』三〇(一九七九年)。

(3) 一八世紀の探検と地理学的仕事の全容については、オリガ・アレクサンドロフスカヤ『一八世紀ロシアにおける地理学の成立』(モスクワ、一九八九年)。また、一八世紀の北ロシア辺境のカレリヤをめぐっては、V・ピーメノフ、E・エフシュテーイン『カレリヤのロシア研究者』(ペトロザヴォーツク、一九五八年)。

(4) 例えば、民族衣裳をめぐっての一八世紀の都会と農村の文化の在り方に関するビョートル・ボガトイリョーフの言葉を参照。「一八世紀ロシアでは、村が都

市から比較的独立して、それが経済上の条件から一層強められていた。というのも、一八世紀には、一九世紀よりも村がずっと豊かだったからである。衣裳についても、一八世紀の村のそれが階級と民族をよりはっきりと示す機能をもっていた、とある(『衣裳のフォークロア』一九三七年、邦訳は一九八一年、せりか書房)。

## 八

一八世紀を彩る数々の旅行が無数の事物との接触をもたらしただらば、それは、事物ひとつひとつに名前を与えることによって世界の認識のフレームワークを作るといふ作業を不可避にしたのは言うまでもない。

「新たな」事物とその背後にひそむ生活と文化とを切り離すことなしにまるごと着床させた言葉を記録し、登録しなくてはならなかった。調査・紀行の記録を空聞誌とするならば、言葉誌が求められたのである。

したがって、ピョートルによる「文字改革」(一七〇四年)をあたかも待っていたかのように、「新たな」世界と文化を「新しい」言葉でもって切り取り、アルフ

アベット順に配列する多数の語彙集と辞書がフォードル・ポリカールポフによるスラヴ・ラテン・ギリシャの三言語対訳の『レキシコン』(一七〇三年)を筆頭としてつぎつぎと作成されることになった。それは複数言語の平等主義に貫かれた、まさに「辞書編纂革命」(ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』一九八三年、一九八七年邦訳、リブポポート)の到来であった。こうしたレクシコンと辞書の全体像は、ヴァレンチン・ヴォンペールスキイの小さなベンフレットながらも内容の密度の濃いビブリオグラフィである『一八世紀の辞書』(モスクワ、一九八六年)を点検することによってうかがい知ることができるだろう。そのバンフレットには、年代不明のものも含めて一七世紀末から一八〇〇年までに編纂された二七七点があがっているが、そこには、狭義の言語辞典のみならず、諺・言い回し・会話辞典、法學事典、歴史事典、家庭百科、医学百科、動物・植物などの自然科学事典などなど考えうる限りの情報分野別の辞典を見出だすことができるのである。<sup>(1)</sup> まさしく、ロシアの一八世紀はレクシコ

ンと辞典・事典の世紀であった。

そうした中であって、タチーシチェフが一七四五年に科学アカデミーにたいして提出した未完の『ロシア歴史・地理・政治・民間レクシコン』(一八世紀三、四〇年代に執筆され、AからKまでの全三巻が一七九三年に刊行。最近では、彼の『選集』一九七九年、に収録)は、歴史上ならびに同時代の地名、国名、人名、身分名、民族名、さらには民俗学・民族学的な用語までも収録した総合的な歴史・地理事典として今なお類を見ない画期的な試みである。この彼が、先にふれたロシア最初の地理学的調査者であったキリーロフのバシキーリヤの地図作製の後任者であり、かつ最初の『ロシア史』の著者であり、また、『諺集』の編者でもあったことを想起するならば、タチーシチェフは地理・歴史・言語・民俗・民族の学の交錯地点に位置していたと見える。そしてこうした彼の視点の根底を支えていたのは、言葉・タームと語彙集によって対象世界を文節化していこうとする意志であった。

一八世紀前半が、タチーシチェフの仕事に代表され

るように事物と言葉とを「語彙集」として定着させようとする方向性を持っていたとすれば、その後半は、言葉それ自体にいかなるイデオロギーを付与していくのか、平たく言えば、この言葉をどのような彩りと美しさを持つものとして作り出し選択していくのか、という課題をめぐって展開していった。<sup>2)</sup> 貴族・役人・軍人・大商人・行商人・町人・職人・農民・強盗など各階層と生業別の言葉、男性・女性の言葉、世代・年齢別の言葉、都市の言葉と農村の言葉、地域・民族別の言葉、さらにはフランス、ドイツ、フィンをはじめとした外国語も含めたロシアの言語空間が持つ均質さと多様さとが意識され(ヴラジミル・コレソフ『都市の言葉』モスクワ、一九九一年)、数多くの「社会的方言」(ボリス・ウスベーンスキイ)が見出だされたのである。しかもそうした社会的グループの使用による共時的な言語相だけではなく、かつてのノルマたる教会スラヴ語を中心とした通時的な言語相の基準にもとづく「古語」の認定もあわせて、ロシア語における「標準語」獲得の戦い、が一九世紀前半まで激しく続行した

のである。そしてこれは、ヴァシリイ・トレジアコーフスキイの問題提起に始まり、アレクサンドル・シニコフとニコライ・カラムジーンの名高い言語論争へと展開されていった問題であった(ウスペーンスキイ『一八一―一九世紀初頭のロシア標準語史——カラムジーンの言語プログラムとその歴史的根源』モスクワ、一九八五年)。

(1) 一八世紀後半のこうした辞書編纂史の上で、その万能ぶりと百科全書的関心の持ち主として注目されるチュルコフの手になった事典には、『法事典』、『俗信事典』、『神話レキシコン』、『商品総覧』、『人間・家畜の病気治療事典』、『定期市事典』(ただし、これのみはヴォンペールスキイのビブリオグラフィにあげられていない。一七八八年刊)がある。

(2) その大きな指標となる「単純、素朴さ」「わかりやすさ」「平明さ」を備えた言葉としてのプロストレーチエ(現在では「俗語」と訳される)の追求は、ピョートル一世による「言語政策」以来の最大のテーマであった。その際、「話しているように書くべきか否か」という点が、むしろ、その点だけが論争の方向性を決定した。ついでに言えば、この「話しているように」と

いう場合に想起される言語生活のもっとも具体的な現場は一八世紀後半には、やはり演劇の場であり、言語選択にとってもっとも尖鋭的な前線がロシアではつねに舞台の上であったことはロシア文化を見る際に無視できない。

## 九

タチーシチエフが『諺集』を編んだことは上に述べたが、言葉による文化の作品としての諺や言い回しの「収集」が一七世紀末以降に彼以外にも多くの人々の手でおこなわれたことは、口承文学の歴史にとってひとつの新段階が訪れたことを物語っている。ごく身近で、あたりまえの言葉が、ひとつの「文学作品」として記録の対象となったからである。そのほとんどが活字化されて伝わることはなかったが、これは当時の印刷技術と出版状況からすれば当然で、記録がそのまま原稿として人目にふれぬまま残るか、あるいは筆写されて流布するかの違いはあれ、おそらくはそれ以前の時代ではまったく、またはほとんど注目されなかった

言葉の作品にたいしてまなざしが向けられ、それが記述されるようになったことは、ロシアの言語文化史の大きな転換を意味していた（具体的な作品とその全貌は、『一八一二〇世紀の手書き本における諺・慣用語・謎』モスクワ・レニングラード、一九六一年）。

この諺などに続いて次に記述の対象となったのが歌謡であることは、ロシアの音楽文化の長い歴史と伝統からすれば当然だろう。G・テプローフの『仕事の合間に為すこともなし、あるいは歌謡集』（一七五七年）に始まる歌謡集の刊行の歴史は、ヴィクトル・シデーリニコフ編の『ロシア民謡。一七三五—一九四五年の書誌目録』（モスクワ、一九六二年）によって知ることができるが、この世紀半ばから、英雄叙事詩プリーナをも含めた『歌謡集』として時代を画することとなるキルシャ・ダニエロフの『ロシア古謡集』（一八〇四年に第一版）の刊行までの半世紀の間に、ロシア民謡の何たるかが決定されていったと言える。主なものとしては、先のチュルコフの『さまざまな歌謡集』（一七七〇—七四年）、V・トルトーフスキイ『ロシアの素

朴な歌謡集』（一七七六—六九年）、ニコライ・ノヴィコフの『新しく完全なロシア歌謡集』（一七八〇—八二年）、ニコライ・リヴォフ『ロシア民謡集』（一七九〇年）などがあるが、そのタイトル名自体の時間的変遷がはっきりと示しているとおり、歌謡はその特徴づけを与えられながらジャンル分けされて、その中のある特定のジャンルの作品がロシア的な民謡として認められていくこととなるのである。先にふれたラジーシチェフが『ペテルブルグからモスクワへの旅』の有名な冒頭の「ソフイーヤ」の章で「ロシア民謡論」を提示したのは、こうした時代の流れの中においてであった。

「馬は全速力でわたしを運んだ。わたしの馭者はいつものような物憂げな歌をうたいはじめた。ロシアの民謡のひびきを知っている者は、そこに心の悲しみを伝える何ものかがあることを認めるだろう。こうした歌のすべてのふしは、短調である。民衆の耳のこの音楽的な傾向にしたがって執政の手綱がとられるべきである。そのなかにこそ、わ

が民衆の魂のしくみを見出だすことができるからである<sup>(1)</sup>」

(金子幸彦、渋谷一郎による二種の訳を適宜参照した)

ここには、ロシア民謡という言説がはっきりと実体化していった情景がきわめて鮮やかに描き出されている。ロシア民謡とは、インテリゲンツィヤたる旅行者が馬車で旅する時に、馭者の口から自然と発せられて聞くことのできるものであり、その歌は憂いにみちた短調が基本であり、心の悲しみを伝えるものでなければならぬのである。

こうした諺、歌謡とともに、今度は散文である昔話や伝説をあわせて、ロシア口承文学を構成する主要な作品は一八世紀後半から末にかけての時期に「発見」され、「収集」されていった。ジャンルが作られていったのである。その動きと並行する形で、ロシアの「文学研究」が制度として完成しつつあったことを考えるならば(アレクサンドル・クリーロフ『一八世紀ロシアの文芸学』モスクワ、一九八一年)、口承文学の作品

もひとつの制度の中に収められていくのは目前であった。にもかかわらず、それらは、ジャンルらしさをいまだ完全に獲得しきっておらず、ジャンルの揺れと逸脱を多分に持っていたために、それを耳にして記録しようとした人々の方法としての「とまどい」をのぞかせてくれるのである<sup>(2)</sup>。

(1) このすぐあとに続く一節、「ロシア人を見よ。物思いに沈んでいるのがわかるだろう。人が憂さをはらしたい、あるいは、自身の言うには、陽気になりたいから、彼は居酒屋へ行くだろう……」が、ロシア人の発作性・極端性などなどのいわゆる「民族性」をめぐる議論の根拠となっていることはよく知られている。しかしこの点についても、民族性という言説の成立のプロセスを考慮することなしには、素朴で実感主義的な印象批評にしかならない。

(2) 昔話をめぐるジャンルの揺れと逸脱、昔話という言葉説の成立については、拙稿「昔話の「成立」『ロシア文化の基層』(日本エディタースクール出版部、一九九一年)。また、一八一―一九世紀初頭の歌謡をめぐる、詩人の詩と民謡との「相互侵犯」についてはアンナ・ノヴィコーヴァ『一八一―一九世紀前半のロシア詩と民

話』(モスクワ、一九八二年)が詳しい。

一〇

一六六七年七月三〇日にエカテリーナ二世が招集した「新法典編纂委員会」は、事実上は成果をもたらさないままに、一年余で解体したが、これによってロシア社会を構成するメンバーの階層化とそれによる実体化が生まれた。例えば、一七六八年の委員会では、二十六人の代議員によって反貴族・反農奴的立場が表明されたが、その中には二人のカザーク、二人の非ロシア人とともに、七人の農民代表が数えられるのである。そのことは同時に、農民をロシア社会の中の一階層として認定することとなったのであり、これがいわゆる「農民問題の発生」(ボリス・クラスノバエフ)である。ふりかえてみれば、エカテリーナの時代は、社会と文化を構成する多くの基本的要素と、それらが多くの場合に生み出す対立項がつきつきと顕在化・可視化し、それゆえそれら相互の関係が固定していかざるをえない時期だった(文字文化対口承文化、インテリ

ゲンツィヤ対民衆としてのナロード、権力・国家対民衆、都市対農村、農業対商業)。したがって一八世紀後半のロシア絵画史の中に、ミハイル・イヴァノフの牧童もの、シバーノフ、ヴィシニャコフ、エルメニョーフらの農民もの(特にエルメニョーフの貧民、乞食、放浪者もの)のシリーズはその芸術的完成度から見ても注目すべきである)、ロタリー、エリクセンらの「ロシア・タイプ」などといった「農民画」というジャンルが成立したことは偶然ではない(これに関しては、ヤコフ・ブルーク『ロシア・ジャンルの源泉にて。一八世紀』モスクワ、一九九〇年、が実に周到に論じている)。農民像というものが画定し、農民こそがロシアのナロードという言説の中心とならなくてははいけなかったのである。

しかし、そうした関係の固定化にたいする反撥とすりぬけも生まれ、関係の「ほころび」も見えた。プガチョーフに代表される「辺境」での反乱、そして社会階層の面で言えば、いわゆる「農奴インテリゲンツィヤ」<sup>(1)</sup>の登場がその例である。後者について言えば、

ロモノソフ、タラス・シェフチェンコをはじめとして、俳優、音楽家などを中心とした「才能ある」農奴・農民で、取り立てられ、「成り上がった」人々が一八世紀後半以降つぎつぎに輩出したのだった。彼らの存在は、農民たちにとっての羨むべき理想であったが、また同時に、実体化しつづつあった社会階層をさらに固定し、ナロードという言葉の生成媒体ともなったのである。

つねに不可視であるはずの社会と文化はひとつの過渡期になってはじめて可視的になりうる。一八世紀の末にかけてのロシアにあって、ロシア民俗学・民族学は、民俗的なるもの・民衆的なるもの・ロシア的なるものが「成立」していくプロセスの中で誕生しようとしていた。

(1) この言葉自体、一九世紀末に用いられるようになったものである、この興味深い社会集団についての最近の成果は、マヤ・クルマチョーヴァ『ロシアの農奴インテリゲンツィヤ』(モスクワ、一九八三年)である。

(2) 一九七〇年代後半以降のソ連で「文化」をめぐる議論が民族学、民俗学、文学、歴史学、哲学、そして記号論などの分野を越えて「文化学」(クリトウロロジーヤ)として展開していたこと、特に一八世紀文化史についてのクラスノバールエフの仕事、A・コプイロフの研究史のフォーロー(一九八六年)を参照。

(一橋大学教授)